令和6年10月10日発行　通巻1008号 ISSN0017-6605

手足の不自由な子どもたち

はげみ

令和6年度／No.418
10/11
October — November

特集 災害に備える3

第42回（令和5年度）肢体不自由児・者の美術展入賞作品『世界の広さ、なりたい自分』
森山　大誠

社会福祉法人 日本肢体不自由児協会

はげみ

令和６年度／No.418
10/11
October — November

特集 災害に備える３

目　次 Contents

広場　「隠す勿れ」今、昔～総動員防災のススメ～ …… 澤村　愛 … 2

Ⅰ 地域に障害者を可視化する取り組み

Sec.1　ひとりが描くひとつの点 …… 小池　アミイゴ … 4

Sec.2　地域と保護者と共に備える特別支援学校の防災対策
防災情報をきめ細かく発信してリスクへの備えを共有する …… 田村　康二朗 … 8

Sec.3　地震災害対策 ～当事者として取り組んできたこと～ …… 倉本　雅代子 … 12

Ⅱ 震災・水害を経験　今だから思うこと

Sec.4　震災から学んだ人と人とのつながりの大切さ
～能登半島地震を経験して～ …… 宮野　理香 … 16

Sec.5　能登半島地震の被災地から …… 松田　郁夫 … 22

Sec.6　地域で暮らし、地域で成長することが災害対策につながる
～能登半島地震を経験して～ …… 紅谷　浩之 … 26

Sec.7　災害時に力を発揮した日頃の付き合い
～東海豪雨を経験して～ …… 大川　美知子 … 31

Sec.8　千曲川の氾濫を経験して …… 大久保　千鶴 … 35

Sec.9　北海道全域のブラックアウト発生と障害児者の災害時個別支援計画の作成 …… 清水　誠一 … 39

Ⅲ 最新防災あれこれ

Sec.10　医療機器が必要な子どものための災害対策マニュアル …… 中村　知夫 … 44

Sec.11　災害時のトイレについて …… 山本　耕平 … 50

コラム１　トイレを気にせず外出できる社会を目指して―モバイルトイレ― …… 内山田　はるか … 54

コラム２　防災の心がけと最新グッズについて …… 岡部　梨恵子 … 56

今号の表紙 …… 森山　大誠 … 58

広場

「隠す勿れ」今、昔
～総動員防災のススメ～

元東京都立光明学園ＰＴＡ　会長
はげみ編集委員
澤村　愛

日本肢体不自由児協会は東京大学名誉教授（整形外科学）高木憲次博士によって昭和17年に創設されました。高木博士は差別や偏見を排する表現として「肢体不自由」の概念と用語を提唱され、肢体不自由児に対して医療・教育・職業訓練の賦与を三つの柱とする「療育」という概念と用語を提唱されました。

高木博士は親に対して「**隠す勿れ**」※1と提唱されました。当時は、手足の不自由な子が生まれると家の中に隠されて育てられ「見かけないので世の中に居ない」ことになっていました。高木先生は、大学での研究と診療をしながら、街中に出向いて個別調査をし「そういう子どもが世の中に居る」ということを発信して「世の中に認知させる」ことから始められました。

学校教育を受けようとすれば治療の機を逸し、治療に専念すれば教育の機会を失う肢体不自由児のために、治療を受けながら教育を受けることのできるところ、「教療所」を是非ほしい※2と博士は願いました。

私の次男が卒業した東京都立光明学園（以下、光明学園）のルーツは、東京市立光明學校という「日本で最初の公立肢体不自由教育校」です。学校秘蔵の16ｍｍフィルムには「帝大高木博士診察午前十時ヨリ」と板書された診察室で高木博士が光明の児童一人一人を診察される様子の動画が残されています。肢体不自由児教育の歴史は日本肢体不自由児協会の歴史と大きく重なります。私は光明学園のＰＴＡ会長として全国肢体不自由特別支援学校ＰＴＡ連合会会長を担っていた時、日本肢体不自由児協会の理事として迎えられ現在にいたっています。

高木博士は社会に対しては「**好意の無関心**」※3を提唱されていました。私事で恐縮ですが、先日も次男と私と二人で早朝の混み始めた山手線に乗りました。駅員さんを頼らずに電車に乗り込むことはできましたが、新幹線に乗り換えるために品川駅で降りる時「人をかき分けつつ後ろ向きに方向転換し降りたいけれど、この荷物（スーツケース）を持っている。どうしよう」ととても不安でしたが、隣の中年の男性が目配せしてきて、さ

っと私の荷物を持ちホームに降ろしてくださいました。おかげで私は両手で息子の車椅子を操作し安全にホームに着地させることができました。嬉しくなって思わず大きな声で「ありがとうございました！」と叫んだら、その男性はやや照れくさそうにはにかんだ顔でスマートフォンを見ながら聞こえていない素振りでした。まさしく高木博士のおっしゃっていた「**無関心といい乍らも、電車の昇降時なぞには、手助けの要なきやという心づかい的好意はあるのだから、放置的無関心ではない**」※4でした。車椅子の息子と歩いていると「すみません。すみません」という機会が多いのですが、その日は「ありがとう。ありがとう」と言っていました。

さて、今回の特集は防災です。防犯・防災に際し、守るべき者への『認知』は不可欠です。地域に『ここに障害者が居る』と直感的に認知してもらうための取り組み（Ｓｅｃ．１）、学校の防災訓練に地域の人に参加してもらったり、保護者に災害対策情報をオープンにしたりする取り組み（Ｓｅｃ．２）、地域の防災訓練に参加する取り組み（Ｓｅｃ．３）を『令和の隠す勿れ運動』として執筆していただきました。

被災の体験を共有して『備えを想像』してください。『自助』へとつながります。能登半島地震（Ｓｅｃ．４・５・６）、東海豪雨（Ｓｅｃ．７）、千曲川の氾濫（Ｓｅｃ．８）、北海道のブラックアウトの経験談と災害時個別避難計画作成の必要性（Ｓｅｃ．９）、お出かけ上手は避難上手、楽しみながらできる日常の備えなどを執筆していただきました。

国立成育医療研究センターからの最新情報『医療機器が必要な子どものための災害対策マニュアル』では、平時からの準備の内容（特に電源確保）が、自助・互助の部分の準備を中心に書かれています。こちらを参考に地域の方と一緒になって災害対策を進めてください（Ｓｅｃ．10）。

災害時、飲むこと、食べることは我慢できても排せつは我慢できません。「トイレ」に関する最新情報（Ｓｅｃ．11・コラム１）、防災グッズと心がけに関しての最新情報を防災アドバイザーに執筆いただきました（コラム２）。

高木博士は『療育』の定義の中に『時代の科學を總動員して』※5という言葉を使われました。それは自然科学のみではなく、社会科学や、人文科学も含まれると解釈されています。

災害が起きればその地域の人全てが被災者です。被災者が被災者を助ける中、障害者が専門家へつながるまでにはどうしても時間がかかります。私たちはあらゆる手立て（『隠す勿れ』、『好意の無関心』、『自助』、『共助』、『近助』など）全てを『総動員』し、その間を生き延びなければならないのです。

今号が障害者が地域で生き抜くための手立ての一助となる事を願ってやみません。

【引用・参考文献】
※1・2・3・4・5　社会福祉法人日本肢体不自由児協会
高木憲次―人と業績―復刻版　平成14年12月20日発行